

大学入試センター試験および国公立大二次・私大

# 大学入試 分析と対策

# 英語

2018  
平成30年度

学校法人 河合塾  
英語科講師 江本 祐一

新啓林館

この冊子の内容は次のURLからもアクセスできます  
<http://www.shinko-keirin.co.jp/keirinkan/tea/kou/eigo>

## (1) 筆記試験の概要

2018年度の筆記試験は、実践的なコミュニケーション能力とさまざまな文章の読解能力を問うという現行課程の方針に沿ったものであったが、共通一次試験・センター試験で変わらず出題されてきた対話文完成問題が姿を消したことが、大きな変更点であった。また、第5問で2017年度にやや特殊な内容の英文が出題されたが、2018年度は、それをさらに推し進めたとも言える、形式的にも内容的にもこれまでに出現されたことのないタイプの英文が出題され、この部分での読み間違いが多かった（後述参照）。総語数は、2017年度の4,335語に対して4,317語、平均点は2017年度の123.72点に対して123.75点で、いずれもほぼ昨年並み。対話文完成の問題の出題2問がなくなった一方で、第4問Bで1問増えたために、総マーク数は、2017年度から1つ減って54。配点も2017年度から少し変わり、文法・語法系の問題の配点が44点から47点に増え、読解系の問題の配点は142点から139点に下がった。音声に関する問題の14点は2017年度と同じである。読解系の問題の配点が微減したとは言え、読解力重視の傾向に変化はない。

## (2) 設問別分析

## 第1問

2017年度同様に、Aが発音問題、Bが音節分けのないアクセント問題で、A・Bともほかの3つと異なるものを選ぶ問題。いずれの単語も発音・アクセント問題で問われることの多い典型的な問題である。2018年度の特徴としては、2017年度以上にいわゆるカタカナ語の出題が増えたと同時に、そのカタカナ語を問う問題の正答率が低いことが挙げられる。具体的には、A問3で、bird / hard / journey / workといった発音問題では定番とも言える単語の下線部の発音が問われているが、河合塾の再現データ（以下正答率はいずれも河合塾の再現データによる）によれば、現役生で21.1%、卒業生で23.7%となっており、2018年度のセンター試験で最も正答率の低い問題だった。また、helped / laughed / poured / searchedの下線部の発音を問うA問2では、現役生の正答率50.0%に対して、卒業生の正答率は48.6%で、現役生の正答率が卒業生をわずかながら上回っていた（現役生の正答率が卒業生を上回っていた問題は、この他に

は、第1問B 問4、第3問B 32であった）。いわゆるカタカナ語と言えるものとして、発音問題では、先に挙げたbird / hard / journey / workの他、commit / help(ed) / search(ed)が、アクセント問題では、advance / engine / limit / foundation / opinion / agency / championship / delivery / supermarketが出題されており、近年にないほどカタカナ語の出題が多い。発音・アクセント問題に典型的な単語は言うまでもなく、カタカナ語も含めて、日頃から正しい発音、アクセントを心がけておく必要がある。

## 第2問

Aでは2014年度以降2か所の空所補充の問題が引き続き出題されている。語彙にせよ、文法や語法にせよ、斬新な問題が出題される印象の第2問Aであるが、ここ数年は、普通の文法・語法問題という印象が強い。2018年度も標準的な内容の出題であった。

## 第2問A 問2

Brenda went 9 to get something to drink.

- ① at downstairs      ② downstairs  
③ the downstairs      ④ to downstairs

ここで取り上げた問題は、現役生と卒業生の正答率の差が16.4ポイントで、最も正答率に差がついた問題。この問題は全体の正答率も65.4%で、第2問Aの中では最も正答率が低い問題である。downstairsが副詞であることの知識が問われている。downstairsやupstairs, abroad, overseasなどが副詞であるという知識が受験生に不足していることは、日頃、英作文の添削をしても実感できる。もっと言えば、最近の受験生はあまり品詞という概念が確立していないようである。おそらくgo to downstairs(×)と言っても相手に通じるであろうが、やはり正確な表現を身につけることがコミュニケーションには必要であろう。これに対して、salaryにつける形容詞がcheapやinexpensiveではなくlowであることを問う問1や、would rather do ... than do ~を問う問10は現役生、卒業生とも9割近い正答率であった。その他、時制を問う問題（問5）や関係詞を問う問題（問6）が出題されているのは例年通りであるが、2018年度は、関係詞の問題として出題されたのは、what we thought was needed to finish the projectといういわゆる連鎖関係代名詞節を完成させる問題であった。

Bの語句整序問題は、2017年度同様に3問とも6つの選択肢で対話文形式の出題。いずれも、再現データでは7割を超す正答率で、2017年度の“How come + 平叙文

の語順?”のように、極端に正答率の低い問題はなかった。

Cでは2015年度以降、応答文完成問題が出題されている。2017年度は文法・語法の知識を問う性質が強い出題となっていたのに対して、2018年度は、発話数、全体の語数ともに増え、設問箇所に至るまでの文意を把握する必要性が高まっており、出題のなくなった対話文完成問題の要素が加わった出題となっていた。

#### 第2問C 問1

Shelly: I can't wait till next Tuesday.

Lisa: What's happening next Tuesday?

Shelly: Don't you remember? There's going to be a jazz concert after school.

Lisa: Really? I thought it 24

(A) was going to be	→	(A) on Thursday,
(B) was planning to be		(B) on Tuesday,
→		(A) because I'm wrong.
		(B) but maybe I'm wrong.

再現データでの全体の正答率は49.4%で、第2問Cの中で最も低い。最初のかたまりについては、空所の前の主語がit[= the jazz concert]であることから、(A)を選ぶ。2つめのかたまりについてはShellyとLisaのそこまでのやり取りから、Lisaがジャズコンサートの日を火曜日と思っていたなかった、ということを読み取り、(A)を選ぶことになるが、対話文中にThursdayという言葉が出てこないだけでなく、間接的にThursdayを意味する言葉も出てこないことから、受験生は戸惑ったようである。問2、問3は英文量は多いが、正答率はそれぞれ52.7%、75.0%であった。

#### 第3問

Aの不要文選択問題は、2017年度同様に、選択肢となっている文が連続していないものも出題された。2017年度同様に、比較的解答しやすい問題で、問1は9割程度、問2、問3も8割程度の正答率であった。2015年度の問3をピークに問題が易しくなると同時に、このタイプの出題も定着し、過去問をはじめとする練習問題も豊富になり、受験生に十分な対策ができるようになってきているとも言えよう。

Bの発言の主旨選択問題は、ある大学での「映像制作の課題」についての学生たちの話し合いの一部からの出題。2017年度は発話者が過去最高の6人であったが、2018年度はさらに発話者が増え7人となった。2017年度と同様に、32は複数の発言者の意見を集約して答える問題が出題されており、30と31の正答率が

8割近いのに対して、32は正答率が53.2%で各段に低くなっているが、これも2017年度と同じ傾向。複数個所を照合しなければならない問題では、正解を得るのに苦勞する受験生が多いようである。なお、先に指摘した通り、32は、わずかではあるが、現役生のほうが卒業生よりも正答率が高かった問題の1つである（現役生：53.6% 卒業生：52.3%）。

#### 第4問

Aでは「商品選択での色の重要性和意味」を論じた英文とグラフを用いた問題が出題された。グラフ中の項目を埋める問題、部分の理解を問う問題、パッセージ全体のテーマを問う問題、最終パラグラフに続くパラグラフのテーマを答える問題という出題内容で、2017年度と同様の出題内容。全体としては解答しやすい問題だった。

Bでは、2014年度以降ウェブサイトを用いた問題が出題されてきたが、2018年度は紙ベースで「父親向けの料理教室」の広告を用いた出題。2017年度までは3問であったが、2018年度は4問で、2017年度には出題のなかった計算問題が出題された。問3が最も正答率が高く86.8%、計算の絡んだ問2が最も正答率が低く72.7%で、全体的な正答率が高い。

#### 第5問

2015年度まではメールやブログを用いた出題、2016年度、2017年度は物語文の読解問題が出題されたのに対して、2018年度は「惑星Xへの探索日誌の抜粋」が出題された。2017年度は主人公が朝起きるとネコになっているという特殊な状況設定の物語であると同時に、5つの設問中3問が本文中にはっきりと記述されていない登場人物の心情を問う問題であったために難度は高めであったが、正答率はいずれも70%を超えていたのに対し、2018年度は問3、問4がいずれも3割の正答率となった。問3はreservationsの意味を問う問題であるが、これは受験生が一般に覚えている意味と異なる意味で用いられているために、文脈を利用した意味の推測が必要な問題であった。また、問4はこの日誌を書いたのは誰かを問う問題で、DAY19、DAY40の記述から、タコに似た生物が地球を探索に来たときの日誌であることを読み取ることが必要な問題で、複数個所からの判断と、先入観を持たず、素直に英文を読み取る冷静さが求められている。

#### 第6問

「科学技術の進歩がもたらすものの見方の変化」に関する論説文からの出題。2017年度同様に、語句の意味類推問題の他、パラグラフ単位の内容一致、本文全体の



タイトルの選択問題がAで出題され、Bではパラグラフごとの要旨の選択問題が出題された。語句 (archaic) の意味を問うA問1の正答率が最も低く52.0%であったのに対し、9割を超える正答率の問題 (A問4, B 53) もあり、全体の正答率は高かった。

1つのパラグラフ内で文と文のつながりを考えながら読み進め (第3問A)、1つパラグラフが終わるごとにその内容を確認し (第3問B)、次のパラグラフの内容をある程度まで予測し (第4問A 問4)、さらには1つのパッセージ内ではパラグラフとパラグラフのつながりを考えながら読み進める (第6問B)、といういわば当たり前の読み方が求められ、またそうすることで高得点が得られることが、センター試験の読解問題の特徴である。このような読み方をすることで、全体の文意がとれるため、細部に対する理解も深まり、未知の表現が出てきても、立ち往生することなく読み進めることができる。

例年、本稿で指摘している通り、読解力の強化には、文法的知識と語彙力を高めるとともに、論説文をはじめ、エッセイや物語文、さらにはウェブサイトの記事など、さまざまなタイプの英文を読むことが必要である。その際にはよくわからない部分があっても、少なくとも1つのパラグラフは最後まで読み切り、全体の内容を把握する訓練が効果的であろう。そのためには、比較的やさしめの入試問題でパラグラフごとに内容一致問題がついたものなどを利用することが考えられる。また、読解系の授業の予習の際は、あらかじめ生徒に制限時間を告げておき、まずは辞書なしで英文を読み、設問に答えさせる練習、つまり「予習は模擬試験だ」という姿勢での練習も効果的であろう。私自身の場合、生徒には、「予習段階で辞書を使う際は調べたい単語の半分だけを調べ、調べた単語は絶対にその場で覚えること。残りは文脈から推測すること」という指導をしている。外国語である以上、未知の単語があるのは当然のことで、それに対応するかという訓練をさせることが必要である。また、一度読んだ英文を繰り返して読む、という訓練を嫌がる生徒もいるが、既習英文を繰り返して読むことで、読解のスピードが上がるとともに、語彙力の定着にも効果的である。その意味で、授業で扱った英文や自分が問題集等で読んだ英文は繰り返して読むように指導すべきであろう。これらはセンター試験に限らず、国公立二次や私大入試の対策にも有益なはずであるし、英語が必要なのはセンター試験だけ、というような生徒でも総合的な力が高まるのではないだろうか。

### (3)リスニング試験

2016年度に大きな出題傾向の変更があり、2107年度同様に2018年度もそれを引き継いだ形の出題であった。読み上げられた語数は2017年度の1,145語に対して2018年度は1,144語で、ほぼ同じであるが、設問・選択肢の語数は502語から575語に増加し、英文を素早く読み取る必要性が高まったと同時に、これまで以上にさまざまな応答のしかたの知識が求められる出題となった。平均点は2017年度の28.11点 (これは2012年以来初めて6割を下回った得点) に対して、22.67点で過去最低の平均点であった。

平均点が下がった理由は、設問・選択肢の語数の増加と、特に第2問での応答のしかたが単純なものではなかったことが、主なものであろう。また、第1問で出題された計算の絡む問題が例年と比べて複雑であった。

問2 How much of their own money will each person pay?

- ① 10 dollars.                      ② 15 dollars.  
③ 30 dollars.                      ④ 35 dollars.

読み上げられた英文

W: Our bill is 85 dollars.

M: I have a fifteen-dollar discount coupon.

W: Remember, Mom gave us ten dollars. Let's use that as well.

M: OK, and then we can split the rest.

85ドルの買い物をするが、15ドルの割引券があること、母親から10ドルもらっていることを考えると、2人が払うべき金額は60ドル。これを2人で割るので1人当たり30ドルの支払いとなり、③が正解であるが、計算が3回必要であること、fifteenとfiftyの聞き間違いの恐れがあることなどを考えると、正解にたどり着くのは意外に難しい。

また、変則的な応答の例としては、店から帰って来たMasaoに対する“Did you get everything? How about the batteries?”という発話に対して、“Oh, you should've reminded me.”と答える問7、絵画コンテストでHiroshiが優勝したことに対して驚いている女性に対する“Right. I thought Ayako had a good chance.”という発話に対して、“You're not the only one.”と答える問9、ピンクの紙と白い紙の必要枚数を逆に言った男性に対して“Well, the other way around.”と答える問11、そして、コンピューターのパスワードを変更したが、新しいパスワードを忘れてしまったという男性に対する“I

think you told me yesterday you'd changed it back to what it was before.”という発話に対して“Oh, did I?”と答える問13などが挙げられる。単に内容を聞き取れば正解が得られるのではなく、聞き取った内容を元に考えなければならない、という意味で、2018年度のリスニング問題は答えづらい問題が多かったと言える。

例年、本稿で指摘している通り、リスニングテストでは、落ち着いて最後まで聞く姿勢が必要で、平常心で試験に臨めるレベルにまで聞き取りの力を高めておかなければならない。対策としては、①文字を見ないで繰り返し聞き、かなりの部分が聞き取れるようになるまで文字を見ない。②問題に答える。③文字を見て、聞き取った内容を確認する。④書き取る、という一連の練習を積むのが望ましい。①でいう「かなりの部分が聞き取れるようになるまで」というのは、個人的には「9割方聞き取れるようになるまで」と考えている。やはり未知の単語や表現は聞き取ることができないであろうから、そのようなものを除いた部分すべてが聞き取れるまで、ということである。また、④の書き取りまではセンター試験では必要ないという意見もあるだろうが、書き取ることによって、聞き取りに対する自信が深まること、語彙力や文法力の向上（聞き取れなかった部分を文法の知識で修復する）や、正しい綴りの定着につながるなど、その効果は大きいと思う。

選択肢の英文をあらかじめ読んでおくことなど、リスニング問題には読解力が影響を及ぼす要素も大きい。そもそも読み上げられた速度で英語を理解できなければ、対話に続く表現を決めることもできないし、聞き取った英語が言い換えられた選択肢が正解となる問題には対応できない。正しく速く読むということは、リスニング問題で高得点を取るためにも必要である。そのためには、筆記試験のところで述べた既習英文の反復読みが効果的である。また、語彙の知識がなければ、せっかく英語が聞き取れても正解を得られないという結果になりかねない。

## 2

## 国公立二次試験

### (1) 概観

一部の大学で出題内容に多少の変化があったが、2017年度同様の出題形式を踏襲した大学が多かった。2016年度に現行の学習指導要領をふまえて、「読む・聞く・書く・話すの4技能の統合」、とりわけ「読む・書く」

を意識した意欲的な出題をした大学の中に、出題内容と受験生の学力の間の乖離が見られたためか、2017年度はややトーンダウンした大学もいくつか見られたが、2018年度もその傾向は続いている。

2018年度の主要な国公立大で、出題形式や内容について目についたものを取り上げる。

**東京大：**毎年のように出題形式に変化が見られるが、2018年度は、第1問(B)は文補充問題である点は2017年度と同じだが、長文中の一部分の内容を英語で要約する問題が出題された。また、第2問(A)は、戯曲の引用を読んで思うことを英語で述べる、という自由英作文の出題であった。和訳もついているために、実質的に英文を読まなくても解答できるが、再現答案では白紙が目立った。そして、2018年度の最大の変更点は、第2問(B)で実に21年ぶりに和文英訳問題が出題されたことである。驚くべきことではあるが、3月初旬に東京大が発表した2020年度からの「大学入試共通テスト」に対する対応のしかたを考えれば、頷ける方針転換かもしれない。和文英訳を行うには、日英の語彙、文法に関する知識が必要であることは当然ながら、与えられた日本語の持つ意味内容を正確に理解し、それを余すことなく英語で表現することが必要である以上、「学力の3要素」や「技能統合」に関する力も十分に測れる、ということであろう。また、2018年度は、2015年度以来の小説が第5問に出題されたことも、出題内容の変化である。

**京都大：**2016年度に大きく出題が変わったが、2017年度はそれを踏襲し、2018年度はさらに出題の変化が見られた。2016年度以降も出題の続いていた純粋な和文英訳の出題がなくなり、第3問は和文英訳と自由英作文の融合問題となった。また、2016年度以降、対話完成の自由英作文が出題されている第4問では、従来にない長い問題文が出題され、解答箇所も2つから4つに増えた。書くべき内容は明快であるが、3つめの空欄で見当はずれのことを書いている答案が多く見られた。

**北海道大：**2017年度に「日仏の労働環境を比較し日本の長所を書く」という超難問が出題されたが、2018年度は「動物園をテレビで代用すべきであるという考えに対する反論を書く」という比較的書きやすい出題になった。

**東北大：**2016年度に全体の記述量が増え、客観問題が減った。この傾向は2017年度、2018年度と踏襲され、下線部和訳と日本語による内容説明の問題が出題され

ている。自由英作文の問題は、2018年度も対話を読んだうえで自分の意見を述べる技能統合を意識した問題。「過去の発明品を1つ取り上げ、それがどのように人々の生活を変化させたか」を書かせる問題で、例年通り、身近なテーマについて掘り下げて書くことが求められている。

一橋大：3つのテーマから1つ選んで書く自由英作文問題で、2016年度は3つのテーマが全て写真や絵画になったのに対して、2017年度は、英文で与えられた3つの状況から1つを選び、その当事者にあてた手紙を書く問題が出題された。これに対して、2018年度は3つの新聞の見出しから1つ選び、ニュース記事を作成する問題が出題された。ここ数年の出題形式の変化は、東京大同様、受験生に事前準備をさせないためであろうか。

名古屋大：2017年度まで出題されていた和文英訳問題がなくなり、与えられた表を説明する自由英作文問題が出題された。また、第3問の読解問題中にも自由英作文問題は出題されており、自由英作文の比重が高まった。

大阪大：2017年度は、自由英作文の問題としてインターネットのQ&Aサイトに寄せられた中学生の相談に対するアドバイスを書く問題が出題されたが、2018年度は与えられたテーマについて書く従来の自由英作文問題に戻った。

広島大：例年通りの出題。ただし、要約問題の字数が増えたこと、内容一致文選択問題が「正しいものを1つ選ぶ」形式から「一致するものにはT、しないものにはF」という出題形式になった。

九州大：ここ数年以降読解問題の語数が増加傾向にあったが、2018年度は約500語減った。設問の指示文が第2問、第3問で英語になった。また、2017年度に第1問で出題のあった200字の要約問題は出題されなかった。

その他の大学では、金沢大、小樽商科大は解答用紙には英語以外書くことのない出題が続いている。2016年度に書きにくさゆえに話題となった金沢大の自由英作文問題は、2017年度に比較的書きやすいものになったが、2018年度も同様であった。東京外国語大では、読み上げられる英文を聞いて、英文で要約する問題と自分の意見を述べる英作文の出題が続いている。また、名古屋工業大では、合教科・合科目的な問題として、数学と英語の合教科を意識した出題が続いている。

## (2) 読解問題

東北大の読解問題を取り上げる。先に述べた通り、下線部和訳と日本語による内容説明問題を一貫して出題している。

### Ⅱ

#### <前略>

Under the assumption that life began on Earth, it must have been the case that the basic chemistry of life existed on our planet before living things emerged, and that sometime and somewhere (C)chemistry became biology. There is no precise definition of what “becoming biology” means, but it is worth emphasizing that biology is just a word for very complex chemistry. <後略>

問3 下線部(C) chemistry became biologyは具体的にはどのようなことを意味しているか、日本語で答えなさい。

「生命の誕生が、地球なのか、宇宙なのか」という内容の論説文で、このパラグラフは「生命の誕生は地球である」という学説について述べたもの。下線部は比喩表現であり、「化学」「生物学」といった意味ではないことを本文全体の内容から読み取る必要があると同時に、本文中に特定の該当箇所があるのではなく、英文全体の内容を考えたうえで、自分の言葉で筆者の比喩表現を説明する必要がある。一見すると古い出題形式のように思えるが、英文の中でのchemistry, biologyといった語が何を意味するのか理解できなければどうまとめていいのかわからない問題であり、「思考力」「判断力」を測る良問である。

なお、これとは別に「読む・書く技能の統合」を意識した問題は、北海道大、旭川医科大、小樽商科大、札幌医科大、東北大、宮城教育大、東京大、東京医科歯科大、東京農工大、筑波大、名古屋大、愛知教育大、浜松医科大、静岡大、京都府立大、山口大、九州大、熊本大、長崎大などで出題されている。

## (3) 表現力

2016年度に「読む・書く技能の統合」を意識した問題が増え、写真やグラフ、地図などのビジュアル的な要素を取り入れた出題が増えたが、2017年度はビジュアル情報を用いた出題は減少した。2018年度も東京大、



一橋大といった有力大学が、ビジュアル問題を出題していないのは変わらないが、例えば、2016年度の地図を用いた出題から、具体例の説明と自分の意見を書く問題に変わった神戸大では、2018年度は再びビジュアル問題が出題された。

ここでは、京都大のⅢ（新傾向）を取り上げる。

Ⅲ 次の文章を英訳しなさい。途中の下線部には、ふさわしい内容を自分で考えて補い、全体としてまとまりのある英文に仕上げなさい。下線部の前後の文章もすべて英訳し、解答欄におさまる長さにすること。

海外からの観光客に和食が人気だという話になったとき、文化が違うのだから味がわかるのか疑問だと言った人がいたが、はたしてそうだろうか。

さらに言うならば、日本人であっても育った環境はさまざまなので、日本人ならわかるということでもない。

下線部には「外国人には和食の味がわからない」という意見に対する反論を書くことになるが、その際、次の「さらに言うならば」とのつながりをしっかり考える必要がある。「例えば文学などと違い、味は身体で感じるものだから、文化の影響をあまり受けない」「日本人も外国の料理を楽しんでいる」という内容の答案が多く見られたが、その場合、「さらに言うならば」をIn additionなどで表すのは不適切であろう。後に続く「日本人であっても…」という部分は、今補った内容に対する補足とはなっていないためであり、その意味で、「さらに言うならば」はIn factなどで表すのがふさわしい。逆に、In additionを活かすためには、下線部には「外国人をひとまとめにして論じるのはおかしい」といった内容が必要になってくる。また、和文英訳の部分では、「海外からの観光客に和食が人気だという話になったとき」「日本人ならわかるということでもない」のあたりは、京都大らしい英訳しにくい部分である。

### 3

### 私立大学

私大では読解重視の傾向が続いており、空所補充、下線部の言い換え、内容一致などが出題の中心である。空所補充や言い換え問題では、単語や熟語等の語彙的知識

をそのまま問う場合と、文意を把握したうえで未知の（あるいは難解な）語句の意味を推測する必要がある場合があるので、基本的な語彙力の強化と英文内容の理解力を高めておく必要があるという点では、国公立大の場合と違いはない。国公立大・私大を問わず、読解問題の長文化が進んでいるが、客観問題中心の私大入試は1題の英文量が多いだけでなく問題数が多いのも特徴で、限られた時間で設問に答えるトレーニングが絶対に不可欠である。

また、2018年度の問題を見て特に強く感じたことは、早稲田大・慶應大と他の私大の間で、問題の難度の格差が拡大した、ということである。例えば、早稲田大の国際教養学部では、二重国籍の問題やEスポーツをオリンピック競技に加えるべきか、といった内容の自由英作文が出題されているが、これらは予備知識がなければ対応できない問題であろう。また慶應大の医学部では、日本人のユーモアと西洋人のユーモアの違いを論じた長文中の第1パラグラフを40～50語で自由英作文させる問題が出題された。おそらくこのような設問でも立てない限り、受験生の間で差がつかないからであろう。

#### 江本 祐一（えもと・ゆういち）

東大、京大、医進の授業を主に担当。京大英文解釈、京大英作文などのテキスト、京大即応オープンの作成チーフ。著書は「英語暗唱文ターゲット450」（旺文社）、「入試英単語の王道」（河合出版・共著）、「センターはこれだけ」（文英堂・共著）など。

